誰もが暮らしやすい社会へ

甲州市立勝沼中学校二年　　天野　蒼太

去年の夏、東京オリンピックで活躍した選手たちから、大きな感動と勇気と力をもらった人は多いだろう。僕もその一人である。そしてその後に行われた「東京パラリンピック」・「北京パラリンピック」を見て、僕はさらに心を打たれた。身体に障害のあるアスリートが、それぞれの条件の下で力を競い合う。手足に障害がある人、視覚障害のある人など、きっと普段の生活をするだけでも不便なことや、大変なことがある人々が、そんなことをみじんも感じさせない力強いプレイで、本気で戦う姿に、僕は驚きと感動を覚えた。

この選手たちがこの世界の舞台で活躍するまでにどんな努力があったのだろう。僕は一年生の時に学校で行った福祉体験を思い出しながら考えてみた。

福祉体験では、車イスに乗ったり、重みを付けて歩いてみたり、目を隠して白杖や点字ブロックを頼りに歩いたりした。車イスは思った以上に進むのが大変だった。普段歩いていても気にならない程度の段差でも、誰かに持ち上げてもらわないと進めず、一人での移動の大変さをしみじみ感じた。目を隠して白杖や点字ブロックを頼りに歩いてみると、目が見えないので方向が全く分からずとても怖かったが、点字ブロックのおかげで歩くことができた。また、質問タイムで「特に不便なことはなんですか？」と聞いてみると、トイレやお風呂だと言っていた。僕たちが当たりまえのように簡単にしていることでも、とても苦労していること、必死で毎日を送っていることを感じた。また、話の中で、「昔は何も縁がないと思って生活していたのに、一瞬の出来事で人生が変わってしまった。」という言葉があった。障害を持つ方の中には先天性の障害の方以外に、事故や病気で障害を負った方などもいる。これまで普通に生活を送ってきた人が急に障害を受け入れるということがどれだけ大変なことなのか。当たり前に学校に通い、部活をしている僕が、もし今日突然事故で手足を失ったら、僕は受け入れることができるだろうか。障害のある方は、このような様々な困難を乗り越えながら、生きているのだと改めて感じた。

しかし、この世の中には、「障害者差別」というものがあることを僕は知った。例えば、障害があるからといって幼稚園・保育園の入園を拒否されたり、小学校入学に際して親の同伴が求められることもあるという。また、障害について、「親の愛情不足だ」と言われたり、車イスの子どもを見て、「悪いことをすると

こうなってしまうよ。」と子どもに話す親がいるという。実は身近でこんなことがあるということを知り、とても驚き、悲しく、許せない気持ちになった。

なぜこのような「差別」が起こるのか。それは、「違い」を受け入れられない社会だからなのだと思う。

「パラリンピックの目的の一つは、いろいろな違いを持った人々が共生する、インクルーシブな社会を築くこと。そのためには、この祭典を通して、障がい者や障害に対する社会の受け取り方を変えていくことが必要なのです」この言葉は、国際パラリンピック委員会会長のアンドリュー・パーソン氏の言葉だ。最近、「共生社会」「多様性」という言葉をよく耳にする。私たちの周りには、色々な人が暮らしている。年齢・性別・文化・身体状況など、人々が持つ様々な個性がこの世の中に存在するのが当然である。でも、私たちはどうしても、自分と違うことを受け入れることが苦手であり、少数派を排除してしまう傾向がある。そうではなくて、いろいろな違いを持った人々が、お互いを理解し、尊重していける社会を築いていくことが必要だと思う。また、最近では、共生していくための「ユニバーサルデザイン」という考え方が注目されていることも知った。「ユニバーサルデザイン」は、さまざまな個性や違いに関わらず、「誰もが利用しやすく暮らしやすい社会になるよう、街や建物、仕組み、サービスなどを提供していこうとする考え方だ。例えば、歩道や公園出入口の段差を解消し、車イスだけではなく自転車の人を安全に通行できるようにする。ペットボトルやシャンプーなどの容器に突起をつけることで、目の不自由な方だけではなく、シャンプーしているときに目をつぶっている場合にリンスと区別できるようにする。このように、ユニバーサルデザインの考え方は、誰もが過ごしやすい環境を作ることで、「特別」を作るのではなく、一人ひとり、誰もが幸せで心地よい社会を作っていくという考え方なのだと思う。

僕はこれから、まずクラスの仲間などに対して「相手を理解し尊重する」という気持ちをもって過ごしていきたい。それが、「誰もが幸せで心地よい社会」の一歩だと思う。